

回、私が取り上げようとまず第一に選んだのが、ヨシコ・ウチダの「カンダおじさんの黒猫」という、この作品である。この試みが、日本における日系アメリカ人文学の紹介および研究の進展にほんの少しでも役立つことができれば幸いである。

本稿を発表するにあたって、山本岩夫先生・松原美恵先生・小林茂先生が編注された『日系アメリカ人の人と歩み―短編集』という素晴らしい本に触発され、教えられるところが多かった。また、とりわけ山本岩夫先生からは、多くの貴重な助言をいただいた。この分野の研究の第一人者である三人の先生方にはこの場を借りて、謝意を表したい。

(付記)

この原稿提出後に、山本岩夫先生から、残念ながら、昨年(一九九二年)の春に、作者のヨシコ・ウチダが他界されたことを教えていただいた。

りのおじさんにとって、なくてはならない存在になり、他の人には決して語られたことがない、本棚の上に置いてある古びた写真に写った日本女性との悲恋の話まで聞かされる。リンコはそんなおじさんの態度に人間的な姿をかいま見、おじさんのことがいつそう好きになる。このような二人の心の触れ合いこそが、この作品の中心的な主題である。

また、この作品の題となっているおじさんの黒猫とリンコの心の触れ合いも主題の一つである。以前、あまり猫好きではなかった彼女も、おじさんの黒猫イッサと触れ合ううちに相思相愛の関係となる。おじさんにとって最も大切なものであった黒猫イッサは、遺言によりリンコの手へ渡され、今は亡きおじさんのことを偲ぶよすがとなっている。このような猫の描き方には、その猫の名前の由来となった小林一茶の作風とも何かしら共通するところがあり、動物を慈しみつつそれに人間自身の細やかな感情を移入するといった日本人的な感性が感じられる。その意味で、この作品の猫は、エドガー・アラン・ポウ(Edgar Allan Poe, 1809-49)の「アメリカ的」黒猫というよりはむしろ、夏目漱石(1867-1916)の「日本的」猫に近いような印象さえ受ける。

しかしながら、我々は、この作品が日本人によって書かれたものともまた違うことを忘れてはならない。それは、日系アメリカ人が移民当初から今日に至るまでたどってきた苦難に満ちた歴史と、「異国」アメリカでたくましく培ってきた彼ら独自の文化にしっかりと裏打ちされているのである。

この作品を読むにあたって、我々はその作者が日本人だとか、アメリカ

人だとか、あるいは日系アメリカ人だとかという先入観を捨ててしまう必要がある。

「わたしたちは自分たちの特別な伝統を誇りに思うべきですが、わたしたち自身だけを理解するのではなく、全ての人々を理解することもまた重要なことなのです。みんな手を取り合って、人間であることを祝福し合わなければなりません。」と作者ヨシコ・ウチダは言っている。彼女は、文学という普遍的な媒体を通して、人種や国境を越え、世界中の人々と心を通じ合わせることを望んでいる。そして、この作品はその作者の言葉通り、世界中の人々の心を通じ合わせることが十分できる普遍的な価値を持っているのである。

4、おわりに

誠に残念なことだが、これまで、日系アメリカ人作家の作品が日本で紹介されることは非常に少なかった。決して、優れた日系アメリカ人作家がいなかったわけではない。ただ、そのような作品が紹介されることが、あまりにも少なかったために、世間の人々にあまりよく知られていないだけだったのである。

日系アメリカ人作家についての浅薄な知識しか持ち合わせていない私のような者が、このような試訳と研究ノートを発表しようと思ったのは、そんな現状を憂い、一人でも多くの人々に日系アメリカ人作家の魅力的で文学的価値の高い作品を知ってもらいたいという理由からだった。そして今

の女性のことについて話し出す。おじさんが昔の思い出に浸りながら話すには、その女性は彼がまだ若かりしころ、彼と結婚するために日本からやって来たのだが、結婚する前に、^{インフルエンザ}流感で死んでしまったということのようであった。その悲劇的な話に動揺しているリンコに、おじさんの黒猫が慰めてくれるようにじやれついでくる。その猫の相手をしているうち、その猫と彼女の間で心が通い合うようになる。また、その猫の名前イッサはある有名な日本の俳人の名にちなんでつけられたということをおじさんは教えてくれる。

それからまもないある日、リンコがいつものようにおじさんに食事を持っていくと、ドアには錠がおろされていて、おじさんからの応答がない。ただならぬ様子に驚いたリンコは、急いで家に帰り、そのことをママに報告する。ママはパパが帰宅するとすぐに、二人一緒におじさんの容態を確かめに行く。その後、二人がおじさんの黒猫を連れ帰って来たのを見て、リンコはおじさんの死を悟る。おじさんの遺品の中から、最愛のイッサをリンコに形見として譲るという内容のリンコに宛てた遺書が見つかる。

そのようないきさつから、今ではイッサはリンコの猫となり、彼女におじさんのことを思い出させる存在である。そして、そんなイッサを見るにつけ、リンコはおじさんとあの日本人女性が、あの世のどこかで結ばれてくれることを願うのである。

日系二世である作者ヨシコ・ウチダは、「故国」日本あるいはその文化に對してある種の郷愁と憧れを持っているように思われる。それは、この作

品の中で、ちらしずしやみそ汁などの日本の食べ物が出てくる他、カンダおじさんの黒猫を狍犬に例えている場面があることから推察できる。

また、この作品の中で描かれている人々は、一世であれ、二世であれ、全て日系人である。語り手の役割をつとめるリンコは、作者の分身とも言ふべき存在の二世の少女で、前にも触れたが、これ以外のいくつかの作品にも登場している。この作品には、リンコの他にも、カンダおじさん、ママ、パパ、ヤマタ先生といった日系人が登場し、アメリカの日系社会における人と人との緊密な結びつきが描かれている。血のつながりなどなく、近所に住んでいる、ただの「おじさん」に過ぎないカンダおじさんに対して、リンコやその両親は身内同然の扱いをしている。自分の家で作った料理を機会あるごとにおすそわけし、困っていればお互いに助け合うといった、かつての古きよき時代の日本で行われていたようなことが、日系社会でも行われていたのだろう。いや、アメリカの日系社会の近所付き合いは単なる近所付き合いというだけに留まらず、「異国」に暮らす同胞間の相互扶助という性質を持っていたに違いない。そのような日系人たちの姿に触れて、我々現代に生きる日本の読者は、心温まる思いがすると同時に我々が遠い昔に置き忘れてしまったものに対するある種の郷愁のようなものを感じざるを得ない。

最初は不気味で怖い存在だと思っていたカンダおじさんだったが、何度も会って話をするうちにそのような誤解も消えてなくなり、しだいにリンコはおじさんと心を通わせるようになる。そして、リンコは病気で寝たき

が非常に多いことが目立った特徴である。

しかしながら、ヨシコ・ウチダの作品が、同じ日系アメリカ人の読者にしか受け入れられないような偏狭な性質を持っているかという点、決してそうではなく、日本人あるいはその他のアメリカ人はもちろんのこと、世界中のあらゆる国々の人々から愛されるような普遍性を持っていることを強調しておきたい。

3、「カンダおじさんの黒猫」について

まず、この作品のあらすじをまとめてみる。

この作品の主人公は、日系二世の少女リンコで、両親と弟のコウと一緒にカリフォルニア州バークレーで暮らしている。ある日、リンコはママから、近くの古びた自動車工場の二階の部屋に住んでいる、両親の友人のカンダおじさんに、自家製のちらしずしを持って行くように言われる。近所の子供たちの間では、おじさんの家にはトカゲ、ヒキガエル、ヘビなどの気味の悪い動物がたくさんいて、おじさんはそれらの動物を乾燥させ、粉にしたものを薬として売って暮らしているとか、おじさんには魔法の力があって気に入らない者には誰かれかまわず呪いをかけるといふ噂があった。それで、リンコも、内心ではおじさんのところへ行くのを嫌がっていた。

恐る恐る、カンダおじさんの家を訪ねて行ったリンコは、ドアをノックした途端、おじさんの黒猫に突然跳びつかれ、その拍子に、持っていたちらしずしを地面に落としてしまう。ちらしずしに泥が混じってしまった言

い訳を必死にするリンコを、意外にもおじさんはやさしく慰めてくれた。

ある日、リンコはママから、婦人奉仕会レタイズ・エイドのために作ったスポンジケーキを一片、カンダおじさんに持って行くように言われる。今度もまたいやいやながらおじさんのところへ行ったリンコは、玄関のドアが珍しく開いているのに気づく。ドアのところまで来たリンコに、おじさんの声がして部屋の中に入るように言われる。その招きに応じてリンコは初めて、おじさんの部屋に入ると、そこは噂とは違い、ヒキガエルなどの生き物は一匹もない、古い本・雑誌・新聞などが散乱している古本屋か、がらくた屋のようなところであることがわかる。また、リンコは本棚の上に日本の着物を着た女性が写っている一枚の色あせた古い写真が置かれているのを見つけて不思議に思う。部屋の隅のベッドではおじさんが具合の悪そうな様子で寝ていて、リンコが近づくと、ママに言っ、医者ヤマタ先生を呼んでもらってくれ、と頼むのだった。

診療の後、ヤマタ先生はパパとママに、カンダおじさんはこれまで十分な食事を取ってこなかったようで彼の胃はからっぽの状態だと言っ。それを聞いた二人は、食事を届けたり、部屋のそうじをするなど、病気のおじさんの身の回りの世話をするようになる。おじさんの健康が回復するまでの間ほとんど毎日、ママが作った食事をおじさんのところまで持って行くのは、リンコの役目になる。おじさんが食事をしている間、リンコはいろいろな話をしてあげるが、ある日偶然、あの写真の女性のことが話題になる。リンコにその女性のことを尋ねられたおじさんは、ぽつりぽつりとそ

難の道のりが始まった。日本と戦争を始めたアメリカは、敵国のスパイとしてその当時、西海岸諸州に居住していた十一万人とも言われる日系アメリカ人を強制収容所に送り込み、身柄を拘束した。そのような強制収容所の一つ、ユタ州トパーズの収容所に、住み慣れたバークレーの地を追われたヨシコ・ウチダも収容された。収容所での彼女は、小学校で教えたり、教員養成のための授業を受けたりしたが、その経験が、彼女の児童文学に対する関心を高めることになった。

約一年間に及ぶつらい収容所生活の後、ヨシコ・ウチダは、マサチューセッツ州にあるスミス・カレッジの大学院で、教育学を修め修士号を得た。その後、フィラデルフィアの学校で教えた後、彼女はニューヨークに移り住んだ。そこで、彼女の記念すべき最初の本『おどるやかん』(*The Dancing Kettle*) が出版された。その本は、彼女が幼い頃に両親から聞いた、日本の民話を集めたものであった。その本の中で彼女が、日本の民話を紹介したのは、それが日本の子供たちだけでなくアメリカの子供たちにも分かち合うことができる普遍的価値を持っている、と考えたからである。

一九五二年からの二年間を、ヨシコ・ウチダはフォード財団特別研究員として、日本で過ごし、日本の民間伝承を集めたり、伝統芸術や伝統工芸などにも興味を持つようになった。

現在、ヨシコ・ウチダは、創作活動の傍ら、多くの子供たちに、日系二世としての、また、作家としての彼女自身の体験を語っている。彼女はテレビ・ラジオ・雑誌などでたびたびインタビューを受けたり、彼女の作品

は書評などで広く取り上げられ、多くの賞賛を受けている。

ここで、前に紹介した『おどるやかん』以外のヨシコ・ウチダの作品を分ける範囲で紹介してみたい。

彼女が子供時代の体験を題材にし、リンコという作者の分身とも言うべき日系二世を主人公にした作品として、『一瓶の夢』(*A Jar of Dreams*, New York : Atheneum, 1982)、『一番やさしい悪』(*The Best Bad Thing*, New York : Atheneum, 1983)、『一番幸福な最後』(*The Happiest Ending*, New York : Atheneum, 1985) などがある。もちろん、「カンタおじさんの黒猫」はその中の一編である。また、強制収容所での体験を元に書かれた『荒地の流浪民—ある日系アメリカ人家族の強制退去—』(*Desert Exile : The Uprooting of a Japanese Family*, 1982)、『トパーズの道程』(*Journey to Topaz*, New York : Charles Scribners Sons, 1971)、『故郷への道程』(*Journey Home*, New York : Atheneum, 1978) などがあ。その他、一世たちのアメリカでの体験を描いた『ゴールド・ヒルのサムライ』(*Samurai of Gold Hill*, New York : Charles Scribners Sons, 1972)、若き日系人を描いた『誕生日の訪問者』(*The Birthday Visitor*)、『日本語が分かったおんどり』(*The Rooster Who Understood Japanese*) などがある。

以上のようにヨシコ・ウチダの作品の中で描かれている人々は、ほとんど全部と言ってよいほど、日系アメリカ人あるいはその家族であり、題材も日系アメリカ人としての彼女あるいは彼女の両親の体験を元にしたもの

【研究ノート】

1、使用テキストについて

Florence M. Hongo et al. ed. *Japanese American Journey : The Story of a People* (San Mateo, CA : Japanese American Curriculum Project, 1985) 収録の Yoshiko Uchida, "Uncle Kanda's Black Cat" を定本とし、翻訳するにあたっては山本岩夫・松原美恵・小林茂編注『日系アメリカ人の心と歩み―短編集』（鶴見書店、1990）収録の同作品のテキストおよびその注を参考にさせていただいた。

2、作者ヨシコ・ウチダ (Yoshiko Uchida) について

ヨシコ・ウチダは、現代のアメリカを代表する日系アメリカ人作家である。そのことは、日系アメリカ人カリキュラム・プロジェクト編集・発行の、日系アメリカ人の歴史・代表的な人物・文学などを紹介している前掲書 *Japanese American Journey* の中で、「カンダおじさんの黒猫」が全文掲載されている上に、幕末から現在に至るまでの間の代表的な人物十一人のうちの一人として、カリフォルニアのワイン王長沢ながさわ鼎みなとらと肩を並べ、作家として、また女性としてはただ一人、ヨシコ・ウチダが紹介されていることから、容易に窺い知れる。ここでは、その本の中の彼女の生涯と業績について書かれた文章の内容をまとめ、必要に応じてそれに補足を加えるというかたちで、作者を紹介してゆきたい。

ヨシコ・ウチダは日系二世としては最初の専業作家で、主に青少年向け

の優れた小説を数多く書き、それらの作品により多くの文学賞を受賞している。彼女は、一九二一年、日系移民の子としてカリフォルニア州アラメダに生まれ、両親の温かい愛情にはぐくまれながらバークレーで育った。彼女は、一九二九年の大恐慌の傷跡がまだ癒え切っていない、どちらかと言えば暗い時代に、日系アメリカ人に対する偏見と差別に立ち向かいながら、幼年期を送った。

日系移民であった両親は、彼女と彼女の姉に日本の文化・伝統・価値観などを教え込んだ。家の中には日本語と英語の本がたくさんあり、彼女の母はそれを幼い子供たちに読み聞かせていた。彼女の母は、文学を愛し、自らも短歌を詠んだ。ヨシコ・ウチダは、そのような文学好きの母親から一番大きな影響を受けている。また、彼女の両親のところには、絶えず日本から手紙が届き、しばしば日本からお客さんが訪れて来た。このように彼女は、幼いときから、日本人・日本文化・日本文学に取り囲まれて暮らしてきたのである。そして、成長するにつれて、彼女は日系アメリカ人の作家が全くと言ってよいほど、いないことに気づくが、その当時、自分が作家になろうとは夢にも思っていなかったらしい。

ヨシコ・ウチダは地元の名門カリフォルニア大学バークレー校で英語・歴史・哲学を学び、同大学を優等で卒業した。彼女の大学生活は平穏で充実したものであったが、一九四一年の日本軍による真珠湾攻撃、およびその後続く太平洋戦争の勃発によって、それは妨げられることとなった。

そのときから、ヨシコ・ウチダがそれから先、歩まなければならない苦

訳注

- (1) この後、この作品の中でも説明されているように、原文の“Uncle Kanda”のうち“Uncle”という単語は血縁関係のある本当の伯父さん（あるいは叔父さん）という意味で使われているわけではないので、「おじさん」というひらがなの訳語をあてることにし、総称としては「カンダおじさん」とした。
- (2) 原文では“vegetables and vinegared rice”となっているが、わかりやすくするために「ちらしずし」という訳語をあてた。また、この作品の中で、先に挙げたもの以外にも日本の食べ物がいくつか出てくるが、たとえ原文で直接その日本名が示されていないなくても、便宜上、日本で通常呼び習わされている名前を使った。
- (3) 原文では“Ladies Aid”で、「婦人奉仕会」という訳語をあてた。婦人奉仕会は、所属する教会のために募金活動を行う婦人団体。
- (4) 狛犬のことを言っているようだが、どうやら、作者は狛犬が神社ではなくて、寺院にいたるものと勘違いしているようである。しかしながら、もちろん、そのようなささいな勘違いぐらいで、この作品の文学的価値が損なわれることは少しもない。
- (5) 幕末から第二次世界大戦前にかけて、まだ見ぬ異国で巨万の富を得る夢を抱き日本からアメリカに移民した人々、いわゆる一世たちは、移民当初、根強い人種差別と戦いながら、生きてゆくための手段として過酷な肉体力労働や農作業をせざるを得なかった。
- (6) 江戸時代後期の俳人、小林一茶（1763-1827）のことであろう。一茶は俗語・方言を巧みに使いこなし、過去の不幸な体験から生み出された独特の作風で数多くの優れた俳句を書いたことで知られている。ここでは、まるで、そんな一茶の苦

難に満ちた境遇と、一世であるカンダおじさんのそれとが、重ね合わされているようでもある。日系二世である作者は、短歌を詠む詩人でもあった母の影響を受け、日本の文学に興味を持ち、それについての素養も備えている。

フを持って行ったとき、ドア越しに彼からの応答はありませんでした。そのドアには内側から錠がおろさされていて、わたしがノックしても、イッサのニャーニャーという鳴き声がドアのむこうで聞こえる他、物音一つ聞こえませんでした。

わたしが、ミートローフを持って家に帰ると、ママは心配そうな顔をしました。パパが家に帰ってくるとすぐに、ママはパパを連れてカンダおじさんの容態を確かめに行きました。

二人が帰って来たとき、イッサも一緒に連れて来られていました。それで、わたしはカンダおじさんの身に何が起こったのか、悟ったのです。

「カンダおじさんは、また病氣なの？」

わたしはききました。

ママは首を振りしました。

「いいえ、ちがうわ。おじさんは、天国へ行ってしまったのよ」

「えっ、何ですって」

「だからといって、悲しがってばかりじゃだめだぞ。お前宛の手紙が、おじさんの持ち物の中から見つかったんだ」とパパは言いました。

パパは、わたしの名前が書かれた細長い封筒をわたしに手渡しました。

そこに書いてあった字は、いかにも老人の筆跡らしく震えていました。中に入っていた手紙はとても短いものでした。その手紙はこんなふうに書かれていました。

親友のリンコへ

わしが一番愛しているものをお前にあげたい。わしの愛猫、イッサのことだ。どうか、あのこにやさしくしてあげてくれ。

カンダおじさんより

そんなこんなで今、イッサはわたしが飼っている黒猫というわけです。イッサがじつと座ったままの格好で、ちっぽけな夢を見ている姿を目にすると、わたしはきつとその猫がおじさんのことを思い出しているのだろうと思うのです。そんなとき、わたしもまた、おじさんのことを考え、その姿を思い出します。そして、わたしは願うのです。おじさんとあの日本から来た女の人が、あの世のどこか、二人が今いるところで、何とか最後には結ばれてくれればよいのに、と。

するためじゃった」

わたしはひどく驚き、ポカンと口を開けたまま、そこに座っているだけでした。それもそのはず、誰かがカンダおじさんと結婚しようと思うなんて、わたしには考えもつかないことだったので。

「それはいつの話なの？」

わたしはとうとうききました。

「ずっとずっと昔のことじゃ。わしが若くて元気だったころ。平原で果物を摘む仕事を日に十六時間もしたり、夏になると汽車でアラスカまで行って、缶詰工場で働いていたころ、オー克蘭ドの高台にある金持ちの白人が住む家で、窓を洗ったり、床を磨いたりしていたころじゃよ。」

そんな大昔のことに思いをめぐらし、カンダおじさんが頑強な体を持った黒い髪の若者だったなんて想像するのは簡単なことではありませんでした。

「それじゃあ、その女の人は、日本からやって来て、おじさんと結婚したのね？」

カンダおじさんは、何だか心も体も、そんな大昔に舞い戻って行ってしまったかのように、黙りこくってしまいました。

「いいや」

おじさんはつぶやくように言いました。

「彼女は、こちらに着いてから一か月後に、インフルエンザ流感にかかって死んでしまった。わしと結婚しないうちにな」

わたしは背すじに寒けが走るのを感じました。そのとき、まるで、その日本人女性の幽霊が突如、その部屋に浮遊して来て、カンダおじさんに、あなたと結婚できなくてすみませんでしたと言っているような気がしました。

カンダおじさんの猫が急に小さな鳴き声をあげ、ひざもとに跳び込んで来たので、わたしはびっくりして跳び上がってしまいました。その猫のつややかな黒い体をさすり、あごのところを撫でてやると、ゴロゴロとものを鳴らし始めたのが聞こえました。その猫は緑色の目を両方つぶり、正真正銘真っ黒でつやつやした温かみのあるかたまりのようになりました。

「イッサはお前のことを気に入っている。あいつは、たいていの人間が嫌いなんじゃないが」とカンダおじさんは言いました。

「わかつてるわ」

わたしは言いました。

その猫がわたしのことを好きになってくれるまで、長い時間がかかりました。その後、カンダおじさんはその猫の名前を、俳句を書いたある有名な日本の詩人(6)にちなんでつけたと言いました。その猫の柔らかくてつやつやしたあごをなでていると、わたしも急にその猫のことが好きになり始めました。わたしが猫を好きになったのは、その猫が初めてでした。コウもわたしもずっと犬好きだったからです。それまでは、満足に猫の相手をしたことすらなかったのです。

それからまもないある日の午後、わたしがカンダおじさんにミートロー

汁や、あったかい茶碗蒸し、薄切りにしたハムや鶏肉、梅干し入りのおにぎりなどを持って行きました。わたしはママが作ったものを何やかやと持って行ったのですが、ときには、相棒としてコウも一緒に連れて行くこととしました。けれども、コウは決まって首を振るばかりでした。

「ぼくいやだ」コウは、ハーマンと同じように言うのでした。

「だって、カンダおじさんに呪いをかけられたくないもん」

「おじさんはあんたに呪いをかけたりしないわよ。ばかねえ」

それでも、コウは自分の意見を頑として変えようとはしませんでした。

コウは、かつてのわたしがそうだったように、その老人を恐れていたのです。

カンダおじさんが、乾燥させたトカゲやヒキガエルを挽いて粉にするなんてことはしない、どこにでもいるような普通の人間に過ぎないことがわかってからは、彼のことかほんの少しですが好きになってきさえしました。おじさんの猫は、わたしが例のぎしぎしきしむ階段を昇って来ても、跳びかかって来なくなりました。それでわたしは、自分の姿が消えて人の目に見えなくなるように、と息をこらすのもやめてしまいました。

ママとパパがそうじをしてくれたおかげで、カンダおじさんの横にあるテーブルに、わたしの座る場所ができました。

「しばらくここにいてくれ、リンコ。そして、今日してきたことを話してごらん」とおじさんは言いました。

そんなとき、わたしは、おじさんに、学校の劇に出演したこと、ピアノ

の練習がいやでいやでたまらないこと、コウを連れて山の手まで行って土曜の昼の映画として上映されていた「ターザン」を見たことなど話したものでした。また、学校用の新品の靴や誕生日にもらった新しいドレスのことについてさえ、話をしました。

「いつか、そのドレスをわしのために着てくれんか？」

おじさんは頼むようにそう言いました。

「もちろん、いいわ」とわたしは答えました。

おじさんがドレスのことにまで興味を示したのは、驚きでした。

おじさんはママが持たしてくれたものを何か食べている間中、わたしにずっとおしゃべりをさせました。わたしもその方が、一人ぼっちで食べるより楽しいことはわかっていたので、おじさんが食べ終るまでずっとそこにいてあげました。それがすんでから、ママが持たしてくれた皿やポットを家に持ち帰るのでした。

ある日、わたしはおじさんに、あの写真の女性について尋ねたのです。

「いったいあの女の人は何者なの？」

わたしは好奇心に駆られてききました。

「誰であろうと、新しいお花がいるわ」

カンダおじさんは箸を置き、まるでこれまでの人生の中で毎日毎日見ることがなかったような様子で、そこにある写真を目をこらしてよく見ました。

「あの女の人のことか？ 彼女が日本からやって来たのは、わしと結婚

ありました。その女性が誰なのか、気になっているところで、カンダおじさんはまたわたしを呼びました。

小さな流し台とこんろの反対側の、部屋のむこう隅にいたてがあり、さらにそのむこうに、色あせたつぎはぎ細工のキルトのカバーがすっぽりとかぶせられているベッドで寝ているカンダおじさんがいました。おじさんは誰にも呪いなんか、かけることができないように見えました。彼は、疲労困憊し、顔色が悪く、年老いて見えるだけだったのです。

「リンコ、急いで家に帰って、おまえのママにヤマタ先生をわしのころまで呼んでくれるよう頼んでおくれ」とおじさんはもの静かな調子で言いました。

そのとき、わたしには、カンダおじさんが本当に病気だとわかったのです。ママがくれたケーキを、自分がしつかりと握り締めたままだということも忘れて、そのままずっと家まで走って帰りました。おかしなことにカンダおじさんの黒猫も、わたしと一緒に来てたのです。あたかも、その猫にはわたしがおじさんの言いつけ通りにするか、確かめる義務があったかのようなのでした。わたしがママにカンダおじさんのことを話して、ママがお医者さんと呼んだ後、わたしはその猫に牛乳と食べ残しのトーストをあげました。猫は牛乳の上に用心深く身を屈め、ペチャペチャとピンク色の舌を出し入れして動かし、きれいなめてしまいました。すっかりたいらげてしまった猫に、わたしがまた、牛乳をあげると、その猫は、何週間もの間、何一つ食べていなかったかのように、それもたいらげてしまっ

たのです。

ヤマタ先生は、カンダおじさんに薬をくれました。それから、おじさんの心臓の具合があまりかんばしくないことがわかりました。けれども、それだけではなかったのです。後でヤマタ先生は、ママとパパのところへ話をしにやって来ました。わたしは、先生が二人におじさんの胃が心配だというような話をしているのを耳にしました。

「胃ですって？」

パパは困った様子で、聞き返しました。

「そうです。胃が全くからっぽです。端的に言うとな彼は、食べ物をもっとっていないからっぽでしょう」と先生は答えて言いました。

ママはびっくりしてしまいました。

「まあ、カンダさんがかわいそうだわ。彼がちゃんと食事をとれるように気をつけてやらなければならぬわ」とママは言いました。

その後、ママとパパは、かどの食料品店に行き、食料品を袋いっぱい買いました。二人は、カンダおじさんの食器棚にサケ・豆・加糖練乳コンデンス・ミルクの缶詰やら、ジャムやらをいっぱい詰め込みました。次の日は土曜日だったので、彼らは二人がかりで何時間もかけて、カンダおじさんの部屋をそうじしたり、散らかっているものを整頓したり、部屋の中に陽の光と新鮮な空気を入れたりしました。

カンダおじさんの体が元気になってきている間、わたしはほとんど毎日のように、見舞いに行きました。わたしはポットに入った熱い豆腐の味噌

「お前にだって、おじさんがどんなに寂しいか、わかっているはずよ」
わたしには、寂しいってことがどんなことか、全く見当もつきませんでした。どんなふうにしたら、人は寂しくなるのでしょうか？ この地球上には何百万人、何兆億人という数多くの人間がいます。それに、何百万冊、何兆億冊という数多くの読まなきゃならない本だってあるのです。ハイキングに行ってみたい山だって、見たい映画だって、ぶらっと立ち寄ってみたい山の手のお店だってたくさんあります。いつも寂しいなんて、カンダおじさんはどうしたっていうのでしょうか？

わたしは不愉快な気分で、カールストーン通りまで走って行きました。それから、息をこらしながら、例のたわみかけた階段を走って昇りました。ドアをノックし、キーをそのドアのそばに置いて走って逃げ帰ろう、そうすれば、きっとおじさんと話をしなくてもすむはずだ、とわたしは考えました。

けれどもどうしたものか、今日は玄関のドアがわずかに開いていたのです。それは奇妙なことでした。というのも、カンダおじさんは、部屋の内側からかならず二つの錠前をおろしてそのドアを閉めていたからです。おじさんの黒猫は座ってドアを見張っていました。その姿はさながら、日本の寺院の門のところで見張りをしている、何頭かいる大きな獅子(しし)のうちの一頭のようにでした。わたしが、その猫をにらみつけると、その猫もまたわたしをにらみ返してきました。今となっては、キーをドアの敷居のところに置いて帰ることはできなくなりました。もし、そんなことをしたら、

その猫がキーをべろりと食べてしまいうに違いないからです。

わたしは、ドアをノックしましたが、いつものカンダおじさんのスリッパをひきずるような足音は聞こえませんでした。

「リンコ、お前かい？」とおじさんが大きな声で言ったとき、わたしはどうしようかと思いました。

わたしは、それに答えませんでした。まだ、走って逃げることであったのです。けれども、おじさんは、またわたしを呼びました。

「リンコ、頼むから中に入って来てくれないかい？」

彼の声は、まるでからっぽの箱の内側から話されているように聞こえました。ドアを押し開けて、わたしは中に入りました。そして、すばやく、その狭い部屋の中を見回しました。影は長く伸び、部屋の中は暗く陰っていました。それでもまだ、その部屋が散らかっていることは、わかりました。古びた本や雑誌や新聞が、いくつも山のように、部屋の床一面に散乱していたのです。その様子は、未だ誰一人あえてかたづけようとしたことがない古本屋か、がらくた屋のようでした。部屋中央のテーブルの上には灰色のほうろく製のコーヒーポットと汚れたカップと受け皿が一揃い置いてありました。わたしは、ヒキガエルやトカゲやヘビを一匹も見つけられず、がっかりしました。けれども、本棚の上に茶色く色あせてしまった一枚の写真があるを見つけました。それには日本の着物を着た一人の女性が写っていました。そしてその傍らには、きつと六か月程置いたままになっていたに違いない、からからに干からびた万寿菊(マリーゴールド)が一本、花瓶に差して

コウは、わたしの幼い弟で、まだあまり人の役には立ちません。

「コウは、まだ幼すぎるからよ。リンコ、お前の方が年上でしょう。ねえ、いい子だから、行ってきてちょうだいね」とママは言いました。

そんなわけで、わたしが行くことになったのです。古ぼけて荒れ果てた様子の自動車修理工場の外側にある、古くてきしむ階段を昇るとき、わたしは息をこらしました。なぜって、隣の家に住んでいるハーマンが、そうすると自分の姿が消えて人の目には見えなくなると言っていたからです。

もちろん、ハーマンの言ったことなんか信じていなかったのですが、もしも、本当に自分の姿が消えて人の目に見えなくなったら、何て愉快なことだろうとずっと思い続けていました。かりに、そんなことが起こったとして今、カンダおじさんがドアを開けたら、空中にこのおすしの皿が漂っているだけで、わたしの姿はどこにも見えないことでしょう。

「もし、お前の姿が消えて人の目に見えなければ、おじさんもお前に呪いをかけられないだろうよ」

ハーマンはわたしにそう言ったのです。

「じゃあ、あんたもわたしと一緒に来て、そんなことが実際に起こるかどうか、確かめてみたら」とわたしは言いました。

しかし、ハーマンは首を振りしました。

「おれ、いやだよ」と彼は答えました。

そのうえ、彼は、自分もわたしとまるっきり同じでカンダおじさんを恐れていることを、決して認めようとはしなかったのです。

わたしが、カンダおじさんの部屋のドアをノックすると、突然、黒くて大きなもの影が鋭い雄叫びをあげて、自動車修理工場の屋根からこちらめがけて跳びかかって来ました。わたしは、おもわず、悲鳴をあげ、その拍子に持っていたおすしを落としてしまいました。後になってから、それがカンダおじさんの大きな黒猫に他ならないことに気づきました。

「あっちに行って、ばか猫！」とわたしは言い、ドンドンと足を踏み鳴らしました。

それから、落としてしまったおすしをできる限り拾い上げ、皿に盛り直しました。わたしは、このおすしに今、泥が少々混じっているのは、全ておじさんの猫のせいなのだと言明しました。すると、カンダおじさんは何だか微笑んでいるような様子を見せ、ほんのちよっぴりの泥なんか、気にしていないと言いました。

ある日、ママが婦人奉仕会（レディーズ・サークル）の集まりのためにスポンジケーキを作ると、それから大きな一片を切り分け、皿にのせました。その後、わたしにそれを持ってカンダおじさんのところまで行くように言いました。

「でも……ねえ。ママ」

わたしはそのとき、おもしろい推理小説を読んでいる最中だったし、そのうえ、やりそびれていたピアノの練習を三十分間やらなければならなかったのです。

「お願いだから」

ママはなだめるように言いました。

〔試訳〕ヨシコ・ウチダ作

「カンダおじさんの黒猫」

山本秀行 訳

わたしの猫が身動きもせず座っているのを見るたび、わたしはきつとその猫がカンダおじさん⁽¹⁾のことを考えているんじゃないか、と思うのです。

おじさんはわたしの本当の伯父さんではありません。彼はママとパパの友だちで、ときどき日本人教会に来ていました。おじさんがどんな仕事をして生活していたか、はつきりとは知りませんが、第一そんなことなんか気にもかけていませんでした。必要がなければ、おじさんと言葉を交わすこともなかったでしょう。というのも他の子供たちと同じように、わたしにも何かしらおじさんを恐れているようなところがあったのです。おじさんは、背が高く痩せぎすで、いつも老けて見えました。彼の顔ときたら、皺だらけで、まるでみくちやにされたティッシュ・ペーパーのようでした。髪の毛とげじげじ眉毛は白くなっていて、両目の瞳の周りには乳白色の濁りがありました。おじさんの着ているものは、しわくちゃで擦り切れ放題で、長い間ずつと着たきりというありさまだったような覚えが、わたしにはあります。

近所の子供たちが言うには、おじさんには魔法の力があり、気にいらない者にはだれ彼かまわず呪いをかけることができるという話でした。またその子供たちの話によれば、おじさんは自分の部屋で飼っているトカゲやヘビやヒキガエルを乾燥させ、挽いて粉状にし、薬として売ろうとしているとのことでした。もし、わたしがおじさんのところにトカゲやヒキガエルを見に行けたら、おそらく彼はそのうちの一匹ぐらいペットとしてくれるのではないかと、時折思ったりもしました。しかし、その反面、そんなことまでして、おじさんに呪いをかけられる危険など冒したくないと思ったりもしていたのです。

ある日、わたしが、とうとうおじさんに会いに行くはめになったのは、彼の住んでいる部屋がわたしたちの家からほんの一ブロックほどしか離れていない、カールトン通りにある古びた自動車修理工場の二階にあり、そのせいか、ママは彼のことを哀れに思っていたからでした。

ママは、大きな器にわたしの大好物のちらし⁽²⁾を作りました。そしてそれを一皿、カンダおじさんに、と用意しました。ママは紙の皿の上にご飯を山盛りにし、それに細切りにした卵と海苔と紅シヨウガで飾りつけたものを蠟^{ワックスペーパー}紙ですっぽりと包み込みました。

「リンコ、カンダおじさんのとこまで、おすしを持って行ってくれないかい？」とママは言いました。

「どうしてコウは持って行けないの？」

わたしは試しに言ってみました。